

私の研究



炭鉱とともに生きた人々の戦後史 — ライフヒストリーのアプローチから —

坂田 勝彦 (さかた かつひこ)

東日本国際大学 健康福祉学部
教授



1. はじめに

近年、日本の近代化を支えた石炭産業の歴史に注目が集まっている。世界遺産に認定された「明治日本の産業革命遺産」の一角を構成する通称「軍艦島」（端島炭坑・長崎県）をはじめ、山本作兵衛の炭坑記録画（ユネスコの世界記憶遺産に日本で最初に登録）など、その歴史を伝える遺構や遺産が歴史的・文化的価値を持つものとして国内外で脚光を浴びるようになった。背景には、炭鉱の閉山から半世紀近くが経過し、かつては地域社会に存在した様々な対立やわだかまりが風化する中、各地で石炭産業の過去が「最後の観光資源」と意識されてきた状況がある（木村2014）。

私はここ数年、こうした石炭産業の歴史について、九州・佐賀県のある産炭地で調査を続けている。その過程で惹きつけられたのが、戦後日本の社会変動をその只中で実際に生きた元労働者や家族の経験であり、今なお地域社会に息づいている往時の記憶だった。

2. 戦後日本における石炭産業の歴史

周知のように、かつて日本各地には大小数百に

及ぶ炭鉱が存在した。だが、産業革命のエネルギーを供給し、近代以降の日本において財閥資本の根源的蓄積を支えた石炭産業は、1950年代半ば以降、原油や廉価な海外炭との競争に巻き込まれ、慢性的な不況に陥った。このエネルギー革命の下、「石炭鉱業合理化臨時措置法」（55年）を端緒に、不採算炭鉱の閉鎖と優良炭鉱の選別とを掲げる「スクラップ・アンド・ビルド」政策が進められることで多くの炭鉱が閉山し、そこで働く人々は生活と人生の大きな変化に直面した。

石炭産業の解体に伴い炭鉱労働者が直面したこれらの状況については、当時、その窮状が「去るも地獄、残るも地獄」と告発されたように、大きな社会問題となった。そして、九州や北海道など全国の産炭地では炭鉱の閉山が相次ぎ、そこで暮らす人々の生活はその根底から突き崩された。こうした戦後日本の社会変動は、石炭産業にとどまらず、多くの産業が経験したものであり、また、全国各地の自治体が今日直面する人口減少やコミュニティの衰退といった問題とも深く関連している。

その一方で、産業の解体とそれに伴う日常生活

の劇的な変容の中、炭鉱で働き暮らした人々は新たな暮らしと人生を求めて試行錯誤を重ねてきた。元炭鉱労働者とその家族が模索したそれらの営みや経験は、昨今注目されているような観光や地域振興の資源としての価値にとどまらず、社会の流動化がより深刻化する中で、時代や社会の変化に翻弄されながらも、その只中でいかに私たちが多様な生存の回路や繋がりを創造できるかという重要な問題に深い示唆を与えるものでもあった（坂田2017ほか）。

3. 研究を着想した個人的背景

——「ボタ山」を巡る父の言葉から

こう書くものの、私が石炭産業の歴史に関心を持つようになったのは、非常に個人的な体験がきっかけだった。私事で恐縮だが、この場を借りてその経緯を少し説明したい。

私の父は九州の佐賀県で生まれ、大学の進学を機に上京し、50代半ばまで関東圏で暮らした。そんな父のもとに生まれ、大学院まで一貫して関東圏で過ごした私にとって、父の郷里である佐賀県は長らく、盆や正月に祖父母を訪ねて帰省することはあっても、それほど身近に感じることはない場所だった。

だがそうした距離感は、父が15年ほど前に郷里へ戻り、そんな父を訪ねた際に遭遇したいくつかの出来事によって大きく変化することになった。郷里に戻った父は、祖父の墓参などで時折訪ねてくる私に、もしかしたら自分の郷里の魅力を伝えなかったのかもしれない。時間を見つけては、呼子や唐津などの観光地をはじめ、県内各地を案内してくれた。そんなあるとき、父の郷里の隣町へ向かう最中のことだった。少し入り組んだ峠に差し掛かり、信号の手前で車を止めた父はふと、「あれは一本松のボタ山だな」と呟いた。「ボタ山って何?」。そう尋ねる私に、父は昔話を交えながら、その辺りがかつて炭鉱で石炭採掘に伴い発生した捨石（ボタ）でできた「ボタ山」が並ぶ場所だったと教えてくれた。

「ボタ」という言葉を知らなければ、かつて佐賀県が産炭地であったことも知らなかった私に

とって、車窓越しの、草木がうっそうと茂るその山は、特に意識しなければただの峠道の一角にしか見えなかった。だが、約半世紀前にそこで少年時代を過ごした父は当時、隣町へ遊びに行く途中などに、ボタが日々積み重なり黒い山の体をなしていた姿を見ていたという。そして、約半世紀がたった今もその風景をはっきりと覚えていたのである。かつてその地域で過ごしたことのある者には見えるものが、その場所で暮らしたことのない者には見えないこと。何気なく父が語った、懐かしさの滲んだその言葉は、強烈な印象をもって私たちが生きてきた時間と空間の隔たりを感じさせるものだった。父は知っているが私は知らないその過去は、私がまだ知らない日本社会の「戦後」という時代の確かな一面を示しているのではないか。そうした直観から、私は石炭産業の歴史に強い関心を持つようになった。

4. ライフヒストリーというアプローチ

それからいくつかの幸運な出会いがあり、私は現在、佐賀県でかつて最大の産炭地であった大町町（杵島郡）に通い、そこで操業した杵島炭鉱の元労働者とその家族、関係者へのインタビュー調査や資料調査を進めている。こうした個人的な経緯と問題関心は、実のところ、私のそれ以前の研究内容とも深く関わっている。

私の専門は社会学で、特に社会問題についてライフヒストリーというアプローチから研究を進めている。生活史やオーラルヒストリーといった言葉でも表現されるこのアプローチは、様々な社会問題や社会的・歴史的イベントを体験した人々の人生に照準を当て、そこから社会の構造と変動に迫る研究手法だ。この手法の強みは、過去の社会的・歴史的イベントや社会問題について、歴史の教科書などに記述される抽象的で大まかな括りで理解するのではなく、それと実際に遭遇した人々の経験や言葉に根ざした形で理解することができる点にある。特に産業構造の変化など、マクロな次元で生じている問題を具体的な生活の次元で理解し、生活主体の直面する困難や自律性を明らかにしようとするとき、その本領が発揮される。

例えば、このアプローチの日本における代表的な研究者である桜井厚は、被差別部落の問題について、差別と生活の狭間で人々が戦前戦後の社会変動期をいかに生き抜いてきたかを精緻に明らかにしている（桜井2005ほか）。そのなかで彼は、「日常生活において強力な社会的、文化的規制」を受けつつも、「そのような規制を乗り越えて自己概念を選び取り」、生活を営む実践に、社会的存在としての個人の主体性を見出している（桜井1996：45）。

時代と社会の変化に翻弄されながらも、そうした現実と向き合い、生活を立ち上げる主体として人間を理解し、その経験から時代と社会を捉え返すライフヒストリーというアプローチを学んできた私にとって、先の「ボタ山」を巡る父の言葉は、産炭地で働き暮らした人々の経験が、中学や高校で習ったエネルギー革命や産業化などの言葉や数行の説明に還元できない、より具体的な生活経験に根ざした厚みをもつものであることを示しているように感じられたのである。

5. 「戦後」という時代と社会をまだ私たちは十分にわかっていないということ

以上の経緯と問題関心から、石炭産業の歴史について研究するようになった私は、道がまだ半ばにも達していない現時点でもすでに多くを学んでいる。調査協力者の中には、炭鉱の閉山後、住み慣れた産炭地を離れ、新たな場所で全く異なる職業につき、生活と人生を模索した方々がいた。彼らはそうした第二の人生について、怒りや悲しみ、誇りとともに話してくれた。調査協力者の中には

また、炭鉱の閉山後も産炭地に残り、地元残留者の再就職や鉱害復旧に長年携わった方々がいた。彼らは、閉山とともに大きく変わり果てたその場所を、それでもなお自分たちの生きていく場所として守り続けてきたことを教えてくれた。

ほかにも、戦後の炭鉱労働運動に深く関与し、生涯を政治活動に捧げた元労働者の方や、幼少期を炭鉱街で暮らし、高度経済成長期に集団就職などで都市部へ出たものの、定年後にそこに戻り、石炭産業と街の歴史の継承に取り組む方々など、様々な人と出会った。彼らの経験と記憶は、戦後の日本社会でたしかに生きられた時代と社会の姿を現在の私たちに教えてくれる。それはまた、それぞれが生きる多様な人生がたしかにある時代や社会とともにあったこと、私たちが「戦後」という身近な時代と社会をまだ十分に分かっていないことを示している。

参考文献

- 木村至聖 2014『産業遺産の記憶と表象——軍艦島をめぐるポリティクス』京都大学出版会。
- 坂田勝彦 2017「炭鉱の閉山に伴う広域移動経験者のライフヒストリー——生活と自己の再構築に着目して」『日本オーラル・ヒストリー研究』第13号：111-127。
- 桜井厚 1996「戦略としての生活——被差別部落のライフストーリーから」栗原彬（編）『日本社会の差別構造（講座 差別の社会学 第二巻）』弘文堂：40-64。
- 2005『境界文化のライフストーリー』せりか書房。

<プロフィール>

1978年生まれ。2010年3月 筑波大学大学院人文科学研究科修了（博士・社会学）。2010年4月より東日本国際大学に勤務。

専門は医療と福祉の社会学・地域社会論・生活史。主な研究業績は、『ハンセン病者の生活史——隔離経験を生きるということ』（青弓社 2012年）、「原発事故による避難について考えるために——生活の再建を巡るジレンマ」好井裕明（編）『排除と差別の社会学 [新版]』（有斐閣 2016年）、「炭鉱労働者にとって『文学』とは何であったか——ある詩人の作品と半生から」『ソシオロジ』（第64巻2号、2019年）など。